

ディネの国から —ナバホの子どもたちとわたし—

エイムズ唯子



第5回「少年たちの諸事情その1—母はどこにいますか」

アメリカの高校の校則では、マリファナやタバコはもちろん、生徒としてふさわしくない言葉づかいもきびしく罰されます。ジュリアンとタイソンは、「おい、ニガー！」とよびあって、生徒指導室行きになりました。「ニガー」とは、白人が黒人の奴隷に対して使った蔑称ですから、おなじく白人に痛めつけられたアメリカ先住民の子どもたちが使っていることに、やりきれない気持ちにさせられます。オハイオ州のスラム街の学校で教えていたことがある生徒指導担当のポーター先生のお説教は、さすがでした。

先生：「おまえたち、いいか！オハイオでは、その言葉を使った生徒は、退学させられるんだ。なぜだかわかるか？」

少年たち：「人種差別だからだろ（ぶつぶつ）」

先生：「ちがーう！その生徒が、ハチの巣みたいに穴だらけになって、学校の裏の駐車場で転がされないようにするためだ。そこまで恨まれてもいいっていう覚悟があるのか、よくよく考えろ」

生意気ざかりを一喝で黙らせることのできる百戦錬磨のポーター先生。かたや、ふたりを御しきれないわたし。こちらの焦りに乗じてエスカレートする少年たちを交互に叱りながら、他の生徒たちの課題を手伝って声を囁らすうち、40分のホームルームが終わってしまう日が続きます。

「オレなんか、中退でいい」とみなの前ではうそぶくジュリアンですが、ひとりでわたしの教室にくると、いつもの口答えはなりをひそめ、まるで別の生徒のよう。数学の問題を写す横顔の長く濃いまつげを見ていると、可愛い赤ちゃんだったんだろうな、とってしまうわたしがいます。

先日は、ナバホ語担当のタチー二先生にジュリアンの家庭事情を聞かれました。お母さんが出て行ってしまったらしいのです、とお伝えすると、やはりそうでしたかとうなずかれ、母方のクランがわからないために、クラスで肩身が狭いらしい

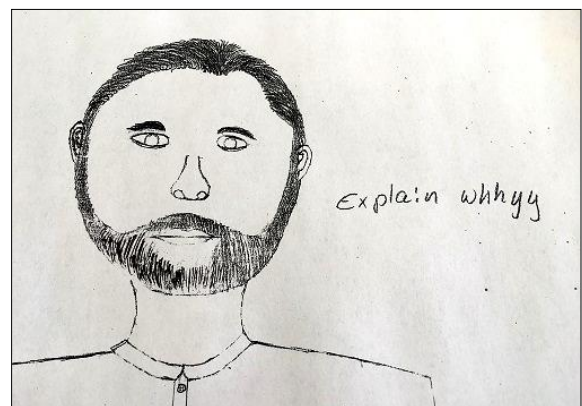
と心配してくださっていました。クランとは、神話上の系譜をあらわす氏族名で、自己紹介をするときにかならず名乗りあう、ナバホのしるしのようなもの。ナバホでは、母方のクランがもっとも重要なのですが、ジュリアンは、自分と母とのつながりを、父にも兄にも聞けずにいるようです。

ホームルームを立て直そうと、タイソンのバスケットのコーチに相談すると、僕が面倒をみましようとの有り難いお申し出。しかし移籍を持ちかけると、オレだけが邪魔なのかと拗ねられてしまいました。みかねて、ジュリアンを引き取ろうかと夫からも助け舟。夫が受け持つ世界史は、ジュリアンの得意科目です。すんなり喜ぶか、一蹴されるか、さてどちらだろうと思いつながら「どうする？」と聞いてみると、目を伏せたままぼそりと「ミスター・エイムズのホームルームに移っても、この教室に来ていいの？」。

ふたりを引き受けていこうと決めてほどなく、昨年秋に他界された樹木希林さんの言葉に出会いました。「御しがたい存在は、自分を映す鏡になる」という釈迦の教えを『不登校新聞』のインタビューで引用されています。個性的な母を演じれば右にでるものがなかった希林さんでした。

～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～＊～～

ジュリアンとの物語は、次回に続きます。



ジュリアンが描いたミスター・エイムズの似顔絵。「エクスプレインホワアアイ(説明してごらん)」は彼の口癖。よく捉えています。